

新うつば

常磐津

全詞章

常磐津

中村重助 述

本名題『花舞台霞の猿曳』

詞章集の題名『靱猿』

作曲者・初演年不詳

新玉の春ぞと告て人來鳥 睦じ月の名にしおふ、是も歌舞伎の周の春、姿も花の帰り咲
時も一陽來復の、当りを願ふ弓始め、弓矢八幡大名の、頼ふだ人の代参に、向ひ町から又今年、返り申しの願事の、恋といふ字が花靱 背中に背負た太郎冠者、傘をさそなら春日山、霞を
分て梅笑ふ、春の野面の色含む、愛鳴瀧の花の顔見世
立帰り、今を春辺と梅花の、色香争ふ源平の、夫は隔てし播磨海、都の中は穩かに、袋に弓の八幡大名
頼うだお人は北面の、更科主水経春様、今日例年の弓始め、鎧泰平を祈りの為、此鳴瀧の八幡宮へ御名代の三芳野殿、お役目御苦労に存じまする
イエそこの御苦労は橘平殿も互ひの事、願ひ叶ふて又今年、お前と二人物語 こんな嬉しし事は御座んせんぬ、もう御代参の役目仕舞たからは、春の野もせを認めながら、サアサア一緒と手を
取を振払ひ

ア、是はしたり寄りやりますな寄りますな、狂言詞も頑固に
烏帽子素袍を仮初ならぬ頼うだ人の御名代、御用であらば横柄に太郎冠者あるかやい
ハア御前にと蹲踞る

こちらは元より使はれもの、色恋の道白川や、人目の関の袖褌ならで、綱引御引四ツ手引、山ぢやへ山ぢやへ木をひく妻の曰、まはらば廻れ伊勢同者、昔は車今は銭、投さんせ投さんせ、
縞さん紺さん花色さん、コレコレコレ小紋さんやてかせと 引戻されたア、長縄手、心も優な太郎冠者

ハ、ハ、もふ道草のおだけは取置いて、サアお館へ
イヤイヤまだめつたには帰らぬはいな
そりや又何故で御座りますな

サア御主人経春様、毎年の古例故、弓矢と靱を此様に持せて、氏神様へ参らせ給へど、今年はいかふ靱が損じた戻りに靱になる皮をと、のへて来いと、言付つて来たはいな
ハテ女中には似合ねことを仰有りついで御座りますなア
話し半ばへ向ふより、手飼の小猿折よくも、二人が中へ駆込めば、吃驚飛退ぎ

ヤア何だと思つたら、こりやア猿であつたわへ
ヲ、丁度な所へ放れ猿、皮をとつて幸ひの靱に
いへいへこりや大方主が御座りませへ何でも猿遣などが放した猿と見へまする

そんなら其主に断らいでは悪いかへ
何にしる此主に逢たいものだなア
見やる彼方へきよろきよろ目

こゝら在所の得意旦那をくるりくるりと猿廻し
隣り村から今日此村へ、葺屋町へと御勝負の、風に廻され真赤いな赤かんべ、初心は知た初舞台、罷り出たらめ出放題、酒のさの字のその暇に見失ふたる猿丸の、迷子の迷子の太夫やい、
迷子の迷子のおさるやいと呼子鳥、紅葉にあらで咲まさる、まさる目出度猿曳が、紋もでつかり裏梅の、梅の林をうかれ来る

ヲ、太夫此処に居たか、サ爰へ来い来い、寄を隔て、
すりや其猿の主は貴様か、コレコレ何と物は相談ぢやが、その猿をどうぞ譲つては呉まいか
滅相な此太夫殿を手放しましては、翌から商売がなりませぬ
なる程尤もぢやが、アレ彼処に御座る女中は、更科主水経春様といふ、お大名の御代参、今度賭弓の御遊に、大内で用ゆる靱に、あなたの猿を売つては呉まいか
イエえなんばう大内の御遊でも、是ばつかりは御免下さりませ御免下さりませ、詫るに
此方はつけ上り

そんならばどうでもならぬといやるか、女とあなどり上様の、上意を聞きやらねば仕様がある
素袍投げ大名の、威を張つめし弓張の、矢先鋭く立かゝる 猿曳驚き飛しさり
ア、もし待て下さりませ待て下さりませ、成程斯なるからは猿の皮をあげませふが、射殺されては猿の皮に、疵がついて役に立ちますまい、ハテどうか仕様がと、小首傾け点頭て
ヲフよい事が御座ります 猿の一打と申して急所が御座ります程に、皮にも疵の付ぬやうに、打殺してあげませふ
そんならきつと打殺して、サ早う渡せ
ハツ

かしこまつて御座ると立上り、又あるまじきお望みは只今殿様殺せとある、ならぬと言は俺とともに、只一矢にて射殺すと、引に引れぬ強弓の、仰はかなき今日の仕儀、コレましよ
小猿の時から飼置いて、朝夕の煙りさへそちがかけに樂々と暮せしものを情ない
畜生なれどもよう聞よ
せめて今度は人間に生れ變つて来るやうに、数へ込だる一節に
エ、さりととはさりととは、エエ又有かいなさん又あろかいな
是非なく是非なくも立上り、振上し鞭の下廻る小猿のいぢらしさ
アレアレ今のを御覧なされしか、打殺さるゝ鞭とは知ず、船漕ぐ真似を仕まするわいの
そんなら何といふ、殺さるゝとは知らいで芸をするかや
畜生でさへ物を知るに、いかに主命なればとて
ものゝ哀れも顧みず、どうして夫が殺されう、命を助けた連て帰りや
エ、夫は誠に御座りまするか
おいのう

ヤレヤレヤレ嬉しや、お札に猿に舞せませふ、天下太平御武運長久御祈禱に、猿が参つて能仕つる
御知行もまさる目出度、踊るが手元面白や、ハンヤコリヤコリヤコリヤ黄金の数々積揃へ、庭に黄金の花盛り、花実も栄ふ目出度さよ
さらば我らはお暇と、行を引とめ
これ待た
そりやまあなんの事ぢやいな、私しやお前に打込で誑されて咲くコレハ何ぢやい室の梅、笛鳴かける黄鳥衆など納豆の朝毎に飛でれたや主の側、見れば見る程くつきりと、水際のたつよい
男 男やもめと南瓜の蔓は何処までも、さいかち原の中迄も、こちやお前ならば関やせぬ、お前と一生添うなら、お誓や好きな団子を、断物したがり憎いかへ
エ、女子には何がなる、魚れ魚れしお姿を
絵には書せはせぬものを、蕩気ざ惚たが分るまい、まいまい廻はる煤払ひ、枝も栄へて葉も茂る、お目出たや千代の子お目出たやお目出たや、おきよ所の笑ひ草
おどけ難りに小垣の小影の、小暗い所で夜のおとゝのねんねこエ、念が届いてばつちりと、焙烙割とは大胆な、亭主をよくもさる座頭、二人袴の綻びし、中を押へて
やるまいぞやるまいぞ、花盗人をやるまひぞ
おのれ逃ぎよとておいそれと、やつちやしてこい不寐の番
棒と手拭枕もと、つかれたたいね軋寐の寐息窺ひ寄る鼠、そろそろ這出しちよつかいに、はし箱膳棚を踏荒したる畜生め、これもくらはす櫻の棒、
すぢつてもぢつてかぎやりやエイエイトウトウ、やつとふの納太刀、豊かの御代の一踊
立舞ふうちに以前の猿、あたりの梅へ駆上れば、見るより吃驚
アレアレ猿が梅の梢へ、コレ太夫おりて呉れ
そうに三人立かゝり、届かぬ梢の綱渡り、三筋の霞猿曳や、橘花薫る花舞台、笑ひ興じて祝しける